

Prāsāntavinīścayaprātihāryasūtra に つ いて

村 上 真 完

Śikṣāsāmunuccaya には右記の経が引用されている。⁽¹⁾これはチベット訳では東北目録 No. 129、影印北京版西藏大藏經 No. 797 (vol. 32) にあたり、Skt. 題名は Ārya-prāsānta-vinīścayaprātihāryasamādhi-nāma-mahāyāna-sūtra とし、三卷(北京版四〇枚)より成り、Danaśīla-ṽ Yeśes sde によつて、ほぼ九世紀初に訳出されたと考えられる(ちなみにこの経はデンカルマ録、影印北京版 vol. 145, p. 145a² に出ている)。漢訳では寂照神變三摩地經(大No. 648, vol. 15)といひ、玄奘が死(六六四年二月五日)の前年六六三年十二月二十九日に訳したものである(開元録卷八、大五五、五五六a)。玄奘訳はチベット訳の冒頭の部分だけで、全体の約三分の一にすぎず、しかも突如として終つてゐるから、完訳とは考えられない。

チベット訳本の内容は

- ①第一卷。会座の描写。
- ②賢護菩薩の問い(「いかにして無上正等覺より不退転となるか」)

云々)と、仏の答(寂照神變三摩地 prāsāntavinīścayaprātihārya samādhi)。

③第二卷。如来は色にも非ず、色より他なるものにも非ず、不生不滅である。

④文殊の問いに始まり、説法、三乗の建立の問題、学の優位、善根の問題が論ぜられる。

⑤第三卷。聖道の説明。

⑥この三昧を得るための三六の清浄なる智の力、三昧の信解の功德。四二の偈に菩提行のむくい、この経を受持する功德等をのべる。

この経は章を分たない。以上の②、③は賢護に対し、④、⑥は文殊に対する説法の形をとつてゐる。

この経と他経との關係を考えてみよう。

まず Samādhirañjasūtra (月燈三昧經、以下 SR と略す)と關係が深い。SR 第一章が月光童子の問にはじまり、仏が sarva-dharmasvabhāvasamatāvipañcita samādhi (一切法自性平等

所顯三昧を説くが、これは本經の上記②の内容に対比すべきもので、しかもその三昧には種々の觀法、善法を含む点も同様であり、かつ、両者に併行關係がみられる。

この經が寂照神變三摩地の説明として「一切法を如実に理解すること」以下七六項目、及び「一切法平等性を知ること」以下三四五項目を挙げる中、後者の中約二一〇項目がSRと対応する。その対応はSR第一章と(一九二項目)、その内容を偈に述べる第一章と(一四八項目)、第一章の項目に説明を付した第三九章と(一四九項目)に及ぶが、最も第一章に近い。またSR第四章にSRの主題をなす三昧の説明としてあげる四四項目の中、二六項が本經と対応する。

samādhiの説明として多くの善法や觀法を列挙するのは、SRはこゝめ、首楞嚴三昧經(大15, 631a)、觀察諸法行經(大15, 728c)、決定觀察諸法行三摩地、賢劫經(大14, 3a)、了諸法本三昧)等、samādhiを冠する經典等に共通するものであり、その中若干の項目が共通な例は他にもあるが、本經とSRの間の如く、一連の数項目、数十項目が一致または対応する例は、特別な例のようである。(第一表参照)

SRは三世紀初の支謙訳月明菩薩經からその存在が知られるが、本經はさほど古くまで遡って見ることができないようだ。本經がSR第一章(および第四章)から多少の選択を行つて借用したと考えられる。逆に本經からSRが借用したのだ

第1表 Samādhirājasūtra との併行例

Prāsaṃtavinīścayaprāṭihārya			Samādhirājasūtra		
(デルゲ版)	(影印北京版)	(玄奘訳)	(N. Dutt ed. 章, 頁, 行)		
Da	vol. 32	大15	I	XXXIX	XVII
182a ⁶ -b ²	p. 39e ⁶ -40a ²	p. 726b ¹⁰⁻¹⁸	p. 17 ²⁻¹¹ ,	cf. p. 633 ² -634 ⁹ ,	p. 238 ¹⁰ -240 ²
182b ² -183a ¹	p. 40a ²⁻⁸	726b ¹⁸ -c ¹	p. 15 ¹¹ -16 ¹²	cf. p. 628 ² -631 ¹⁵	p. 235 ⁸ -237 ¹²
183a ¹⁻⁴	p. 40a ⁸ -b ⁴	726c ¹⁻⁹	IV p. 45 ¹¹ -46 ⁹		
183a ⁴⁻⁶	p. 40b ⁴⁻⁷	726c ⁹⁻¹⁴	I p. 20 ⁵⁻¹²	cf. 639 ¹⁷ -640 ¹⁸	p. 245 ⁸ -246 ¹¹
183a ⁷	p. 40b ⁸ -c ¹	726c ¹⁶⁻¹⁷	p. 22 ⁹	cf. p. 644 ⁷⁻⁹	p. 250 ¹⁷ -251 ¹
183b ¹⁻³	p. 40c ²⁻⁵	726c ¹⁹⁻²⁴	p. 19 ¹¹ -20 ⁴	cf. p. 639 ⁵⁻¹⁶	p. 244 ¹⁵ -245 ⁶
183b ³⁻⁵	p. 40c ⁵⁻⁷	726c ²⁴ -727a ¹	p. 19 ⁵⁻¹¹	cf. 638 ³ -639 ⁴	p. 243 ⁹ -244 ¹⁴
183b ⁶ -184a ²	p. 40c ⁷ -d ³	727a ¹⁻⁸	p. 18 ⁶ -19 ⁴	cf. p. 636 ¹⁰ -638 ²	p. 241 ¹⁸ -243 ⁷
184a ²⁻⁶	p. 40d ³⁻⁷	727a ⁸⁻¹⁸	p. 17 ¹² -18 ⁶	cf. p. 634 ¹⁰ -636 ⁷	p. 240 ⁸ -241 ⁸

と仮定すれば、本經の一連の項目の中の一部を SR 第四章に何故に配したのであるか。

次に③の仏陀(如来) 觀は、般若經の *Dharmadgaṭa-pari-varta*、冒頭や、SR 第二四章初に類するようであるが、本經の説がより詳しい。しかし本經には色身の語を出さない。またこれについては曇摩流支訳如来莊嚴智慧光明一切仏境界經(大 15, 240c)等にも関連ある説があるが、その經の種々なる譬喩は本經にはない。また中論第二章の説も本經と通ずる。

本經は *Śiks.* に引用されており、その部分の *Skt* 原文が得られるので貴重であり、かつ本經の構成について問題を投じている。(第二表参照)。

第二表の如く *Śiks.* には本經の名を挙げることで四度、八回の引用がみられるが、その最後の引用文は本經チベット訳にはない。

一方 *Sūtrasamuccaya* チベット訳(影印北京版 vol. 102, p.102e⁷-103b¹)、法護訳大乘宝要義論卷七(大 32, 66b⁴⁻²³)にも本經と同名の經の引用文があり、賢護菩薩に対して、正法を摂受するための四法(自ら安樂に執著せず、他に安樂を施し、大悲を得、法を求めて倦まないこと)を説き、その過去因縁物語の章(*śhon-gyi tshul-gyi lehu, pūrvayogaparivarta*)に、無垢威光王子が大妙高仏に大布施をなしたが、その善根も法を求め

第 2 表 *Śikṣāsamuccaya* における引用

<i>Śikṣ.</i> (S. Bendall)	法護訳大乘集菩薩学論 (大 32)	<i>Praśāntavinīśayaprāṭihārya</i> (デルグ版) (影印北京版 vol. 32)
p. 16 ² (經名)	卷二 p. 79a ²	
16 ³⁻⁸	79a ³⁻⁸	195a ³⁻⁶
16 ⁹⁻⁸	79 ¹⁰⁻²¹	194b ⁴ -195a ²
		p. 45a ^{7-b} ²
		p. 45a ¹⁻⁶
83 ²⁰ (經名)	卷六 92b ¹⁰	
83 ²⁰⁻⁸⁴ ⁵	92b ¹⁰⁻¹⁵	196b ²⁻⁴
84 ⁵⁻⁷	92b ¹⁵⁻¹⁸	197b ¹⁻³
84 ⁹⁻⁸⁵ ¹²	92b ^{18-c} ¹	208a ¹⁻⁷
85 ¹³⁻¹⁸	92c ²⁻⁷	209a ³⁻⁵
		p. 51b ¹⁻⁴
86 ¹³ (經名)	卷六 92c ²³	
86 ¹⁴⁻⁸⁷ ²	92c ²³⁻²⁷	208b ¹⁻³
		p. 50e ⁶⁻⁸
○ 146 ¹⁶ (經名)	卷九 103c ¹⁸	
146 ¹⁶⁻²⁰	103c ¹⁸⁻²²	欠
		欠

て努める菩薩の善根の百分の一にもいたらない、とその仏が王子に仰せられた、というのである。

この引用はともに現存の本經にはない。後の引用の後半の方が *Śiks.* の引用と重なる部分である。

上の引用から考えると、本經には増広された異本か、ある

いは同名の別本があつたと考えなければならない。なお内容的には上の引用個所は、現存の本経と矛盾する内容ではない。布施に対する求法の優位は *Siks.* p. 16 にも引かれる本経の部分によつても知られる³⁾。

闍那崛多訳 (585-600) の仏華嚴入如來德智不思議境界經卷下 (大10. 923b³⁾) には寂靜決定神通三摩地の語がみえる。この經の異訳本失訳度諸仏境界智光嚴經 (大10. 916c²⁹) には寂靜分別神通三昧、実又難陀訳 (695-704) の大方広入如來智德不思議經 (大10. 927c³³) には寂靜神通三昧、チベット訳東北 No. 185, 影印北京版 No. 852, vol. 34, p. 188c⁷ には *rab-tu shi-ba rnam-par ñes-pahi cho-ñphrul shes-bya-bahi tin-ñe-ñds-in (=praśāntaviniścaya-prāṇihāya nāma samādhi)* といふ。まさに本経の主題をなす三昧の名である。もつともすべての三昧の名が同名の経を予想するとは考えられないが、ここでは健行三摩地 (首楞嚴三昧) と同様に、それを説く經典があると考へても不当ではないであらう。またちなみにその経に説く「如來は分別なく分別と異なることなく、然も無功用無分別の故に」云々 (大10. 920c) 等は、本経の説と遠く距るとは考えられない。この経は本経を予想していると考えられる。

失訳度諸仏境界智光嚴經の訳出年代を調べてみると、出三藏記集には記載なく、法經錄 (大55. 120c) には失訳として出仁壽錄 (158a)、靜泰錄 (191b)、大唐内典錄 (239c) には訳者を

記さないが、開元錄卷四 (518c) にいたつて失訳として「是れ秦時の訳出に似たり」といつて秦錄に入れている。智昇の眼識を信頼して秦時とすれば前秦より西秦まで 351-431 となるが、この経の訳語には羅什以前の特徵はみとめ難いから、およそ 400 年以後と考えられる。

この経は究竟一乘宝性論 *Ratnagotravibhāga-mahāyāno-tattvantrāsāstra* (中村瑞隆本 p. 31²⁻²¹) に *Tathāgatagaṇajñānācintya viśaya vataranirdeśa* の名で引用されており、闍那崛多訳仏華嚴入如來德智不思議境界經卷下 (大10. 920c¹⁴⁻¹⁵)、失訳度諸仏境界智光嚴經 (大10. 915b³⁻⁴)、チベット訳影印北京版 vol. 34, p. 179a¹⁻⁸ に符合する。

宝性論の著者については問題のあるところであるが、漢訳は勒那摩提によつて凡そ 508-515 には訳されている (宇井伯寿、宝性論研究 p. 17 以下)。

この宝性論よりも仏華嚴入如來德智不思議境界經の成立は古く、更にそれよりも本経は古い³⁾が、他方 *SG* 第一章、第四章よりは新しい、ということが推定できる。

- 1 *Bodhicaryāvatāra Pañjika* でも同じ (註5参照)。法護訳大乘集菩薩学論や大乘宝要義論には寂靜決定神變經という (大32, 79a², 92b¹⁰, 92c²³, 103c¹³, 66b⁴)。

- 2 玄奘訳はチベット訳影印北京版 vol. 32, pp. 36c⁵-40c⁶ にあたり、チベット訳の第一巻の終りちかくまでを含む。後に触れ

たように寂照神變三摩地の説明として、チベット訳では七六項目及び三四五項目を挙げるのであるが、後の方の二六四項目にあたるところで、玄奘訳は突如として終っている。なお、その間において玄奘とチベット訳とは小異は見られるにせよ、一致している。

- 3 SR第一章とこれに対応する第三九章、第十七章については、拙稿「Samādhirājasūtra 研究 1, 17, 38-39 章の比較対照」(八戸工業高等専門学校紀要第1号昭和41年)において、項目を数え、対照和訳を試みた。それによればSR第一章には三三〇(重複三)項目、第三八―三九章には二九〇項目、第十七章には二九七(重複四)項目をかぞえた。なお印仏研15の拙稿参照。

- 4 SR第一章 pp. 21¹~23⁴の九〇項目のうち五項目を除けば、本経には対応がない。本経に対応がない部分には「賢者たちに随喜され」(p. 21¹)とか、多くの形容語であつて、善法でもなく、観法の内容でもないものがある。これらの項目は本経にはとられていない。

- 5 なぞ Bodhicaryāvatāra に対する Prañāḥkaramaiti の Pañjika は本経が二個所引かれてゐる。即ち、

Bodhicaryāvatāra Pañjika Prāśāntavinīśayapratihārya
(P. L. Vaidya's ed.) (チルタ版) (影印北京版 vol. 32)

p. 18⁸⁰(経⁸⁷)

p. 19¹⁻²

209a³

p. 51b¹⁻²
(=Sikṣ. p. 85¹⁸⁻¹⁴)

p. 49¹¹(経⁸⁷)

cf. 195a³⁻⁹, p. 45a¹⁻¹³
(cf. Sikṣ. p. 16²⁻⁹)

この中、後の方は経名のみであるが、その意味するところは、

布施よりも聞法学習の福德が大きい、という上記の箇所を示唆する。

- 6 既に他処で論じた(印仏研15-2, pp. 237-240)ように、SR第一章(の項目)ができた後に、その註釈の形で第(三八―)三九章ができたが、他方第一章は更に増広されて現在形をとるにいたつたと考えられる。本経はその第一章の増広された現在形に近いものを引いたと見られるから、SRがかなり現在形に近づいた以後に、本経の成立をおかなければならない、と考えられる。

以上本経がSRの影響をうけ、また本経の存在が他の文献において示唆されていることを見た。大乘經典の間に於いて、影響関係の見られる一例ともいえる。なおSRと般若三昧経との関係も興味ある例であるので、他日論及したいと考えている。

(附記) 本経デルゲ版チベット訳を見るにあたっては、羽田野伯猷教授の好意あるはからいと、東武氏の勞によって入手することが出来た写真複写によつたものであり、ここに謝意を表したい。